農園を訪ねて＜その４＞

佐倉　小さい農園

日本の農園を紹介する不定期シリーズの４回目は、千葉県佐倉市八木地区にある「佐倉 小さい農園」を紹介する。八木地区は佐倉市の市街地を少し外れた農村地域で、印旛沼流域の一級河川、高崎川沿岸の整備された水田と「谷津田」と呼ばれる丘陵地の狭い谷筋の水田が幾筋もある稲作地帯だ。「小さい農園」は水田 1.8ha、畑 0.8ha、果樹 0.1ha、林地 0.7ha の農地で、無農薬・無化学肥料の農業に取り組んでいる。訪問した 8 月 25 日は、今年の稲刈りの初日だった。残暑の中、稲刈りの手伝いをしながら話を聞いた。

園主の小川道夫さんは、県内の非農家の出身だが、子供の頃は近所の田んぼで、魚やカエル、昆虫などを捕まえて遊んでいた。あるとき、農薬や生活排水のためにタガメやゲンゴロウなど水田に住む昆虫が絶滅の危機に瀕しているという新聞記事を読み、大人になったら、農薬を使わない生き物が住みやすい田んぼを作りたいという夢を抱いたという。その後、大学の農学部を卒業し、青年海外協力隊や NGO で、海外の農村での活動を経験、さらに、県内の無農薬栽培農家で修業をしたのち、2011 年にこの地で農家住宅と水田、畑、山林など約 2ha の農地を得て新規就農した。

小さい農園の稲作では、化学肥料の代わりに、米ぬかと貝化石由来のミネラル資材を施用している。田植えは通常よりも大きく育てた苗（成苗）を植える。農薬を使わないことにより田んぼの生物相が豊かになって、害虫も益虫もバランスよく生息していることや、米ぬかとミネラルの施用で、イネの栄養状態がバランスよく保たれていることによるものか、イネの害虫や病害で困ることはほとんどないという。特に、米ぬかの施用は土壌中の微生物層を豊かにしているのではないかと小川さんはいう。微生物を肉眼で見ることはできないが、ミミズが増え、タニシ、カワニナなどの貝類が増え、オタマジャクシ、カエルも増えている状況を見るとそのように思えるということだ。

一方、無農薬栽培にすることで、課題となるのは除草作業で、大変な重労働だ。雑草が酷い田んぼは株間を狭く田植えをして、草との競合に耐えられるようにしたり、動力除草機も導入したりしているが、除草が間に合わなくなることも時々ある。一方、近年、ザリガニが多く生息する田んぼでは、雑草を繁茂させず、ほとんど除草作業をしなくてよい状態に管理できるようになった。ザリガニは畦に穴をあけたり、成長するとイネを食害したりと、あまり、ありがたい生物ではないが、雑草も食べるため、除草効果がある。水位を上げ下げする時期を調整し、繁殖を促したり抑制したりして、上手に共存できるように工夫している。他の田んぼにもザリガニを放流したらよいのではないかという人もいるが、小川さんは生き物を人為的に導入することには否定的だ。

当日は、昼過ぎまでに 3 枚の田んぼの稲を刈り終え、午後は裏山と近隣の谷津田を案内してもらった。小川さんが就農した頃から、耕作放棄地が増えており、荒れた畑や谷津田が散見された。上流の谷津田が放棄されると水の流れが悪くなり、下流に影響がでる。小川さんは、何枚かの谷津田の栽培を受託し、荒れた上流の水路の草刈りなどもしている。水の流れがよくなると、水路でメダカが観察できるようになったり、山の中の田んぼでホタルが飛ぶようになったりと生き物が再生してきているという。

コンバインで収穫作業をする小川さん

平地の水田や谷津田での稲作の他、果樹やシイタケの栽培、裏山の管理まで、小川さん一人でこなすのは苦労が多いだろうが、小川さんの話を聞きながら、里山を歩いてみると多様な生き物と農家の営みが共生している、楽しみの多い農園と感じられた。